

「仕事と生活に関する男性 WEB 調査」の結果概要

2011 年 1 月

文部科学省委託事業「近未来の課題解決を目指した実証的社会科学推進事業」

お茶の水女子大学

「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和」研究プロジェクト

石井クンツ昌子、林葉子、中川まり、佐々木卓代

1. 調査の目的、対象と方法

(1) 調査の目的

「ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調和」研究プロジェクトの目的は、女性のキャリア形成と男性の家事・子育て参加の困難を明らかにし、子どものウェルビーイングを含めたワーク・ライフ・バランスを設計することである。

この調査では、仕事中心の男性のライフスタイル及び家庭中心の女性のライフスタイルに伴う格差を是正するために必要なこと、及び多様なライフステージに対応した職場環境作りと家庭生活環境作り分析モデルを考えて、望ましいワーク・ライフ・バランスの多様性を考察し、選択肢が拡大する社会へ向けた変革を目指すことを目的としている。そのために、男性の就業履歴(仕事特性、仕事や家庭への考え方)、家庭内環境(子育て、家事分業、親子、夫婦関係)と育児・子育て参加の関係について明らかにする。

また 2010 年 2 月実施予定の無業者を含めた全国のランダムサンプリング調査項目の検討材料ともしたい。

(2) 調査の対象と方法

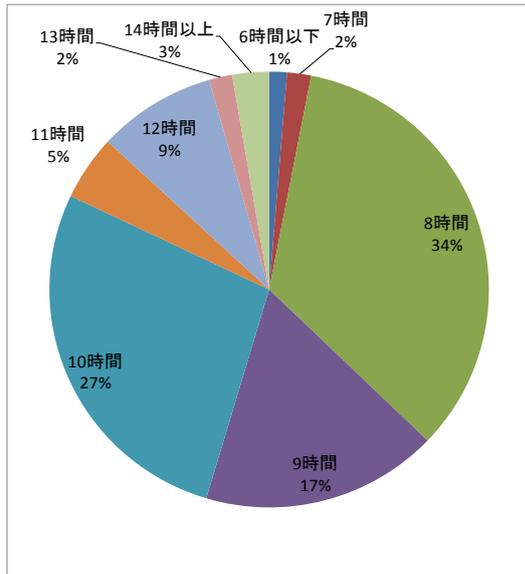
この調査は 12 歳以下の子どもがいる 25 歳～45 歳の有配偶、共働きの男性を対象として。調査対象は、以下の通りである。また首都圏と共働きの多い地域特性のある北陸、その中間地域である東海地方を対象とした。

調査実施時期	2009 年 3 月
調査方法	株式会社クロス・マーケティングの登録モニター インターネットを通じた自記式によって回答
調査対象の条件	年齢 25～45 歳の男性
配偶状態、就業状態	有配偶で共働きに限定
子どもの状況	第 1 子が 12 歳以下とする
地域	首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉) 5 割 東海地方(愛知、静岡、三重、岐阜) 25% 北陸地方(石川、富山、福井、新潟) 25%とする
回答サンプル数	1817 名

2. 男性の属性と子育て参加頻度との関係

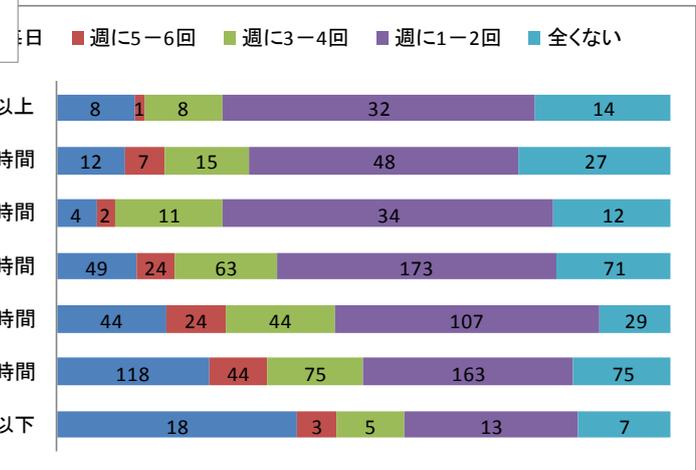
本研究の対象者の一日の平均勤務時間の平均は、9.4 時間で、最長 18 時間だった(図 1-5)。

図 1 勤務時間



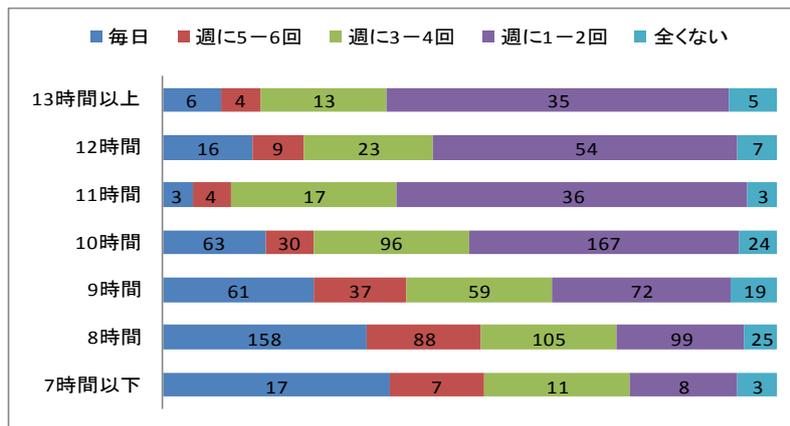
勤務時間と子育てとの関係を見ると、概ね、勤務時間が長い夫は、子育て頻度が低いことがわかった。未就学児の父親の子育て頻度と勤務時間との関係には、興味深い特徴がみられた。勤務時間が 11 時間までは、勤務時間が長いほど、子育て頻度は、低くなるのであるが、11 時間を超えると、子育て頻度が増えていく。この傾向は、「子どもの食事の世話をする」(図 1)「子どもと一緒に食事をする」「子どもの着替えや身支度の世話をする」「子どもの遊び相手になる」「子どもと一緒にお風呂に入る」(図 2)「子どものオムツやトイレの世話をする」

図 2 子どもの食事の世話をする(p<.001)



「本を読み聞かせる」と、この調査で訪ねた子育て頻度の全項目でみられた。この傾向は、正社員・正職員に限定しても同様であった (p<.001)。一方で、インタビュー調査で語っている父親がいたが、食事の世話やお風呂に入れるために帰宅した後、再び、仕事に戻る父親もいる可能性もあると考える。

図 3 子どもと(未就学児)一緒にお風呂に入る(p<.001)



就学児の父親の勤務時間と子育て頻度をみると、未就学児と同じように、概ね 11 時間勤務までは、長時間になるほど子育て頻度が低くなるという傾向がみられたが、勤務時間が 7 時間以下の父親の子育て頻度が 8 時間勤務の父親より低くなっているという特徴があった (図 3)。

その他の父親の属性と子育て参加頻度の特徴としては、正社員・正職員の子育て頻度は週に 1-2 回と回答していた。土日に子育てしていることが推測される。一方、自営業の父親は、子どもと一緒に夕食をとったり、子どもと一緒に家で遊んだりしている割合が多かった。「子どもと夕食をとる」といった帰宅時間に左右される子育て項目については、事務職などのように定時に帰宅しやすい職種や、帰宅時間を自由にできると推測される研究職でしやすく、営業などのように、顧客との付き合い等があると推測される職種では、参加頻度は少なくなると考えられる。

企業規模と父親の子育て参加頻度との関係を見ると、子どもと一緒に食事をする頻度（未就学児、就学児）は、小規模の企業に勤めている父親のほうが高いことが分かった。

3. 男性の成育歴と子育て参加頻度との関係

本調査の対象者の父親の家事・育児参加と対象者自身の家事・育児参加頻度との関係についてみると、「父親はあなたと一緒に遊んだか」では、対象者自身の家事・育児参加頻度は、自分自身の父親と遊んだ経験が全くない人ほど、未就学児の父親では「子どもの食事の世話 (p<.001)」「子どもの着替えの世話や身支度の世話 (p<.001)」「こどもの遊び相手になる (p<.001)」(図4)「子どもと一緒に風呂に入る (p<.001)」「子どものオムツやトイレの世話 (p<.001)」「本を読み聞かせる (p<.001)」といった今回質問した全ての子育て項目で、参加頻度を高く回答した者の割合が多いという結果だった。また、就学児では、「一緒に家で遊ぶ、過ごす (p<.001)」「一緒に家の外で遊ぶ (p<.001)」(図5)「勉強や宿題、習い事の面倒をみる (p<.001)」といった項目で同じような傾向が見られた。このことは、対象者が父親になったとき、対象者自身の父親が反面教師になっていることが明らかになった。

図4 対象者自身の「父親と一緒に遊んだ」頻度と対象者自身が「子どもの遊び相手になる」頻度との関係（未就学児）

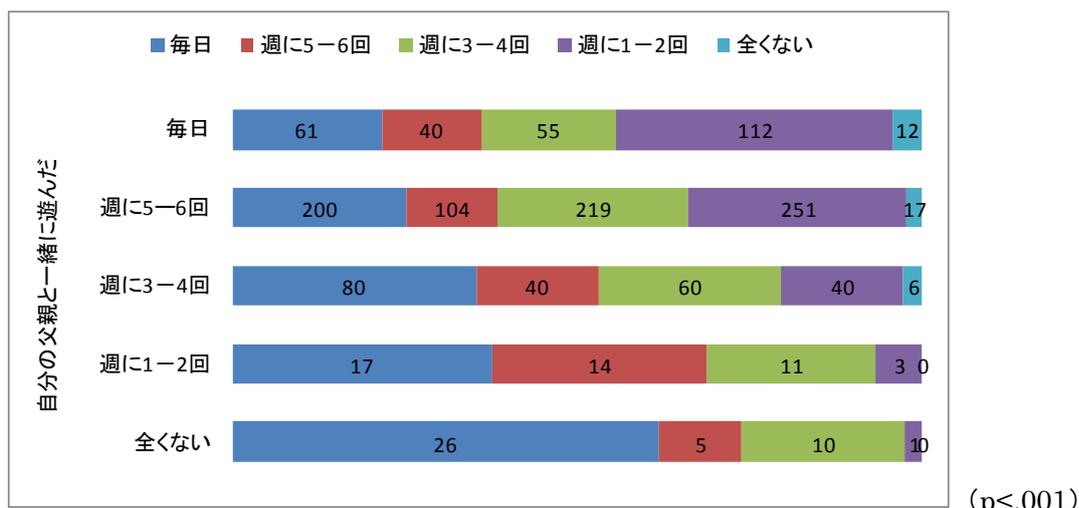
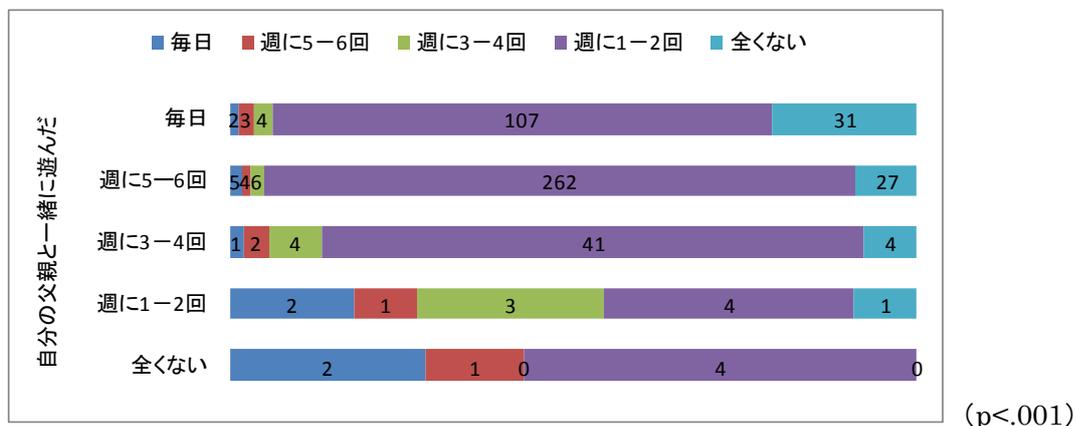


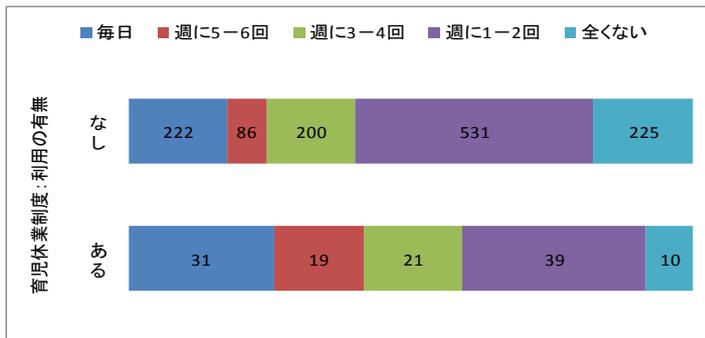
図5 対象者自身の「父親と一緒に遊んだ」頻度と対象者自身が「一緒に家の外で遊ぶ」頻度との関係（就学児）



4. 男性の職場環境と子育て参加頻度との関係

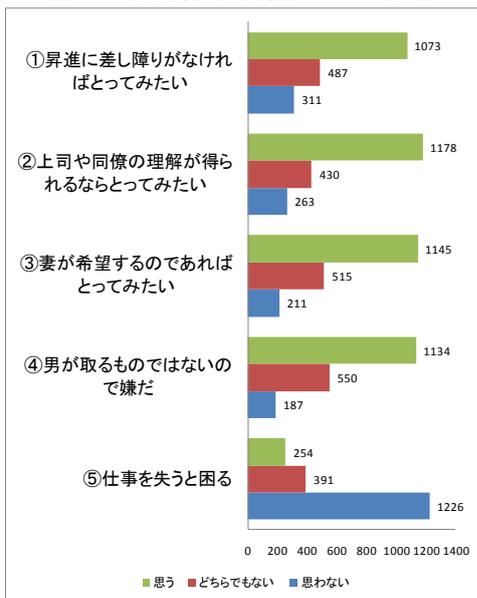
男性も育児休業制度を取得できますが、その取得率は、わずか 1.23%（「平成 20 年度雇用均等基本調査」）にすぎない。本調査においても、育児休業制度を利用したことが「ある」と回答した父親は 120 名で回答者の約 1 割弱であった。育児休業制度を利用したことがある父親の子育て参加頻度は、利用したことがない父親より高い（図 6）。特に、未就学児の父親は、「食事の世話をする」「子どもの着替えや身支度の世話をする」「子どもと一緒に風呂に入る」「子どものオムツやトイレの世話をする」「本を読み聞かせる」など、7 項目中 6 項目で、制度を利用した父親のほうが、有意に子育て頻度が高かった（ $p<.001$ ）。就学児では、「会話をする」「勉強や宿題、習い事の面倒をみる」という項目で頻度が高い傾向にあった（ $p<.01$ ）。

図 6 子どもの食事の世話をする頻度



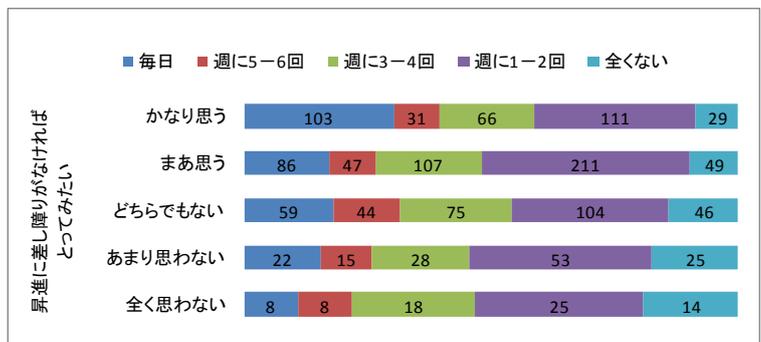
また、育児休業制度について、以下の 5 項目について、「かなり思う」から「全く思わない」の 5 段階で父親の考え方を訪ねた。（図 7）（「思う」=「かなり思う」+「まあ思う」）多くの父親が、育児休業制度をとってみたいと考えている。一方で、「男が取るものではないので嫌だ」とも考え

図 7 育児休業制度に対する考え方



ていることが明らかになった。「とってみたい」気持ちと、男として恥ずかしいという気持ちの両方が存在している。「昇進に差し障りがなければとってみたい」と有意に関係がある子育ては、「子どもの着替えや身支度の世話をする（未就学児/ $p<.001$ ）」（図 8）「子どもの遊び相手になる（未就学児/ $p<.001$ ）」「子どものオムツやトイレの世話をする（未就学児/ $p<.001$ ）」で、「昇進に差し障りがなければとってみたい」とかなり思っている人ほど、子育てに参加する頻度が高かった。就学児に関しては関連性はなかった。

図 8 「子どもの着替えや身支度の世話をする」と「昇進に差し障りがなければとってみたい」との関係



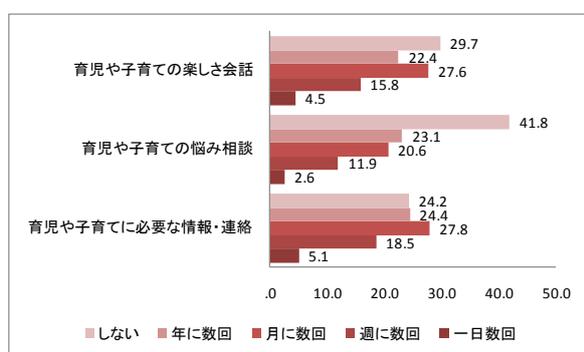
次に仕事の特徴と子育て頻度についてみると、自由裁量度の高い仕事と関連性が高かったのは、未就学児に対する子育て項目だけであった。また、職場環境では、「一時期休業すると、昇進や昇格に不利になる」と、帰宅後にできる子育て項目との関連性が見られた。子育てのために、休暇をとったりすることで、昇進や昇格に影響がでるような職場では、子どものために定時に帰宅することができないことが推測される。

5. 男性の子育てネットワーク

本調査では、父親がどのようなネットワークを持っていると、家事・育児に参加する頻度をたかめていられるかも検討している。子育てをするときに、どのような内容を誰とコンタクトを持つのかを、ネットワークの相手、内容を設定して検証した。ネットワークの相手としては、①親族ネットワークとしての母親、父親、②職場ネットワークとしての男性、女性同僚、③友人ネットワークとして男友達を設定、そして、内容としては、a 育児や子育てに必要な情報・連絡、b 育児や子育ての悩み相談、c 育児や子育ての楽しさ会話の3種類を設定した。子育ての項目は未就学児7項目、就学児5項目である。

父親や男性の友人との連絡頻度など、他のネットワークと比べて、母親とは子育てに必要な情報や連絡は取り合っていることが明らかになった。母親とa~cの内容のコンタクトを、どのくらいの頻度でしているかをみた。結果は図9のとおりである。育児に必要な情報・連絡以外は、

図9 母親ネットワークの種類と頻度 (%) 連絡をとらない(しない)割合が多い。子育ての参加頻度については、ほとんどの項目で有意な関係があった。母親と頻繁に連絡をとっている人ほど、育児参加頻度が高いことがわかった。たとえば、「子どもの着替えや身支度の世話をする」という育児項目と母親とのコンタクト内容「育児や子育てに必要な情報・連絡」「育児や子育ての悩みや相談」「育児や子育ての楽しさ」とは全て、連絡頻度が高い人ほど、子育て参加頻度が

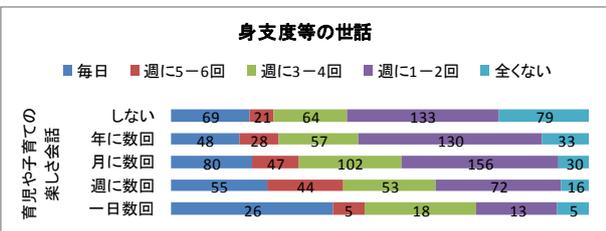
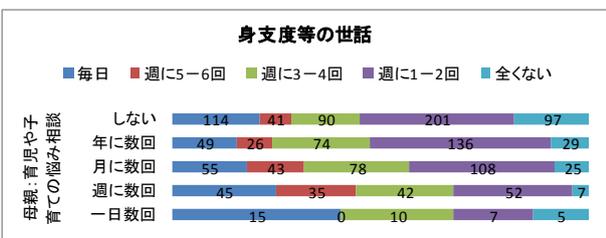
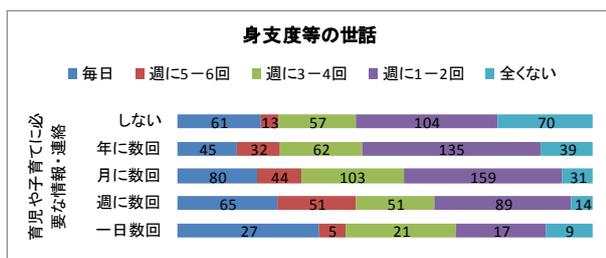


高い (p<.001)。(図10)

一方で、関連が見られなかった子育て項目をみると、「子どもと一緒に食事をする」(未就学児)

「子どもと一緒に夕食をとる(非)」(就学児)で、すべてのコンタクト内容で関係がなかった。相談頻度に関係なく、「毎日一緒に夕食をとる人はとる」ということであろう。

図10 子どもの着替えや身支度の世話



職場でのネットワークをみると、子どものいる男性の同僚とは父親に対してよりは、子育ての楽しさについて話しあっている様子がうかがえる。女性の同僚とは、子どものことについて、話し合う機会を持たないことがわかった。同僚とは、週に数回、子どもに関して話し合っている人が2割ほどいる。一方で、男性の友人では、子育てに必要な情報や連絡を月に数回取り合っている。

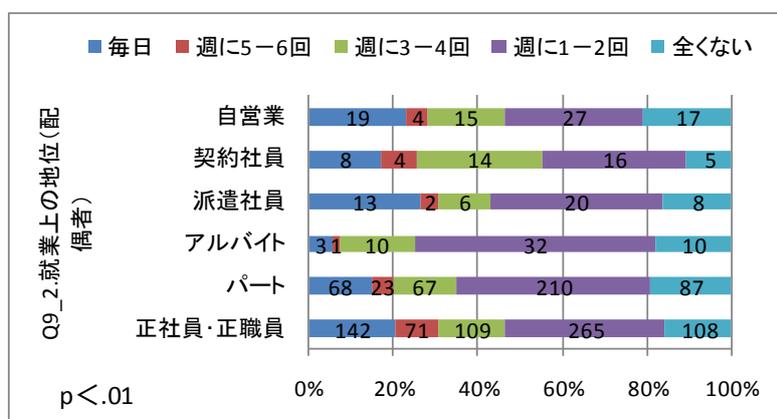
コンタクト内容と子育て頻度との関係については、どのネットワークをほぼ同じ傾向である。子どものことについてコンタクトをとっている人ほど、未就学児に対する子育て頻度は高いことが明らかになった。

6. 妻の就業や子ども数と子育て参加頻度との関係

妻の就業上の地位は、多い方から順に妻が正社員・正職員として就業している人が 822 名 (43.9%)、パート 733 名 (39.2%)、自営業 98 名 (5.2%)、アルバイト 92 名 (4.9%)、派遣社員 65 名 (3.5%)、契約社員 61 名 (3.3%) である。

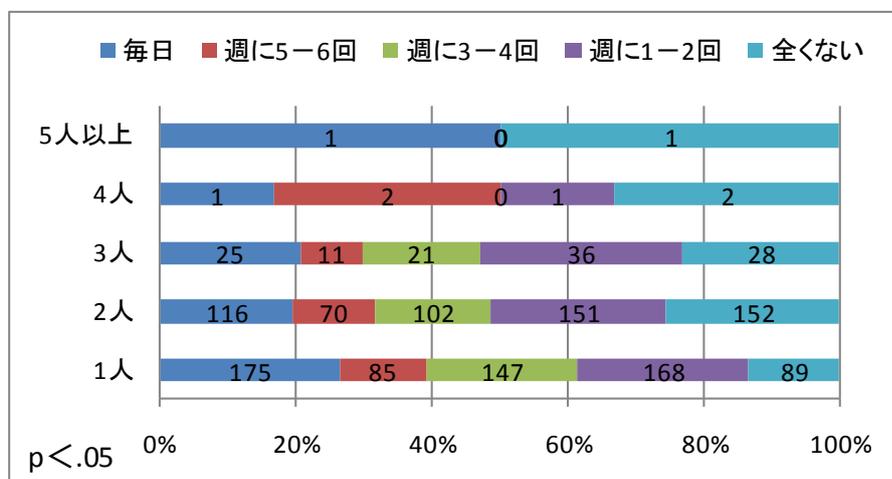
子育て頻度との妻の就業上の地位との関係では、妻が正社員・正職員、派遣社員、契約社員、自営業である場合に、父親が未就学の子どもの食事の世話をする頻度が多く、パートやアルバイトの場合には父親が子どもの食事の世話をする頻度が少ない。子どもと一緒に食事をする、着替えや身支度の世話にも同様の傾向が見られた。一方、子どもの遊び相手になる、一緒にお風呂に入る、おむつやトイレの世話、本の読み聞かせなどは妻の就業上の地位に関係なく、父親は週 1-2 回から 3-4 回程度行っている場合が多い。

図 11 妻の就業上の地位と未就学の子どもの食事の世話をする頻度とのクロス集計



子ども数と父親の子育て参加頻度をみると、平均子ども数は 1.6 人で、多い回答は 1 人で 868 名 (46.4%)、2 人が 854 名 (45.6%) である。また、子育て頻度と子ども数との関係では、小学生以上の子どもをもち、子どもがひとりの場合に、父親が子どもと会話をする頻度が多い。この結果から、子どもが二人以上の場合にはきょうだいで会話をするが、子どもがひとりの場合は、子どもと父親が会話をする機会も多くなることが考えられた。

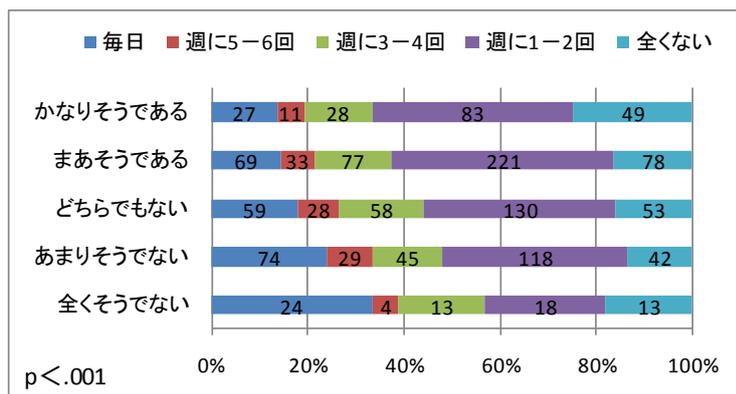
図 12 子ども数と小学生以上の子どもと会話をする頻度とのクロス集計



7. 仕事に対する意識と子育て参加頻度との関係

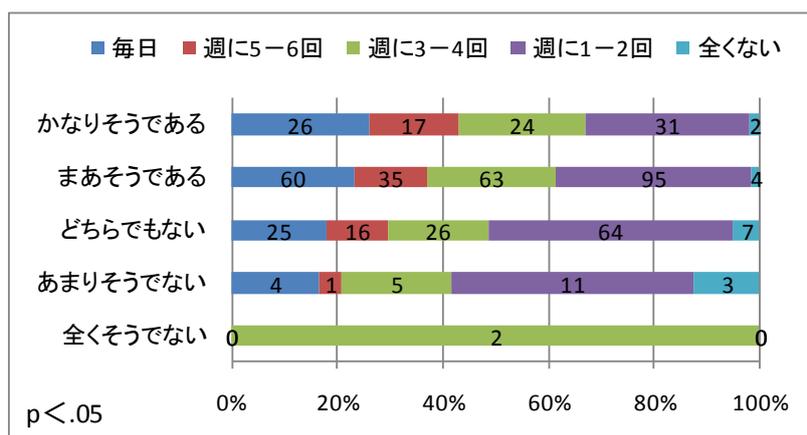
本調査対象者の仕事に対する意識「仕事の負担が重く、常に時間に追われている」と子育て参加の関係をみると、仕事の負担が重く、常に時間に追われていると思う人ほど子どもの食事の世話をする頻度は少なく、そう思わない人ほど頻度が多い。この結果から父親の仕事の重い負担や時間に追われているという意識が、子育て参加を少なくしていることが見受けられる。他では、子どもと一緒に食事をする、着替えや身支度をする、遊び相手になる、一緒にお風呂に入る、おむつやトイレの世話を同様の傾向が見られた。

図 13 「仕事の負担が重く常に時間に追われている」と子どもの食事の世話とのクロス集計



また、仕事の成功よりも家族の方が大切であると思うほど、小学生以上の子どもと夕食をとる回数が多い。反対に、仕事の成功より家族の方が大切であると思わないほど、子どもと夕食をとる回数は少ない。他では、子どもとの会話、勉強や習い事の面倒をみることなどが同様の結果であった。

図 14 「仕事の成功よりも家族の方が大切」と子どもと夕食をとる頻度とのクロス集計



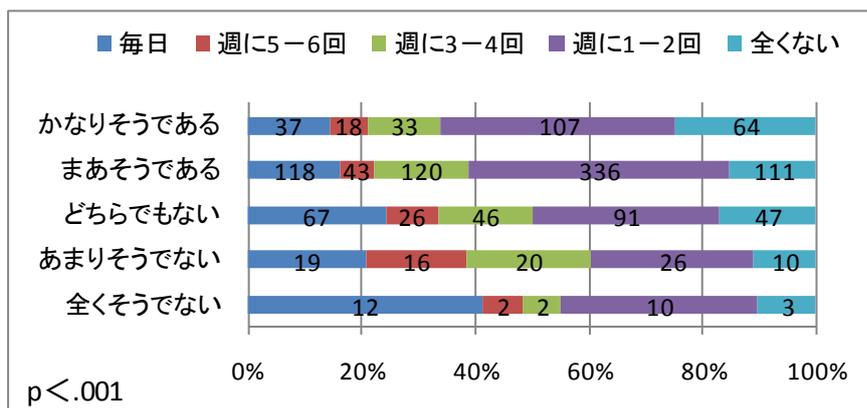
その他の仕事への意識として「仕事のために生活が犠牲になるのはやむを得ない」と思う父親ほど、未就学の子どもの遊び相手をする頻度は少ないことも示された。この結果から、仕事のために生活を犠牲にするという仕事時間を重視する意識が、子育て参加を制約することが考えられた。また仕事のやりがい感と子育て参加とはあまり関係性が見られなかった。

8. 性別役割分業意識と子育て参加頻度との関係

父親の性別役割分業意識に関する主な項目として、経済的に支えることは夫の役割である、男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである、などの質問について5段階で回答を求めた。

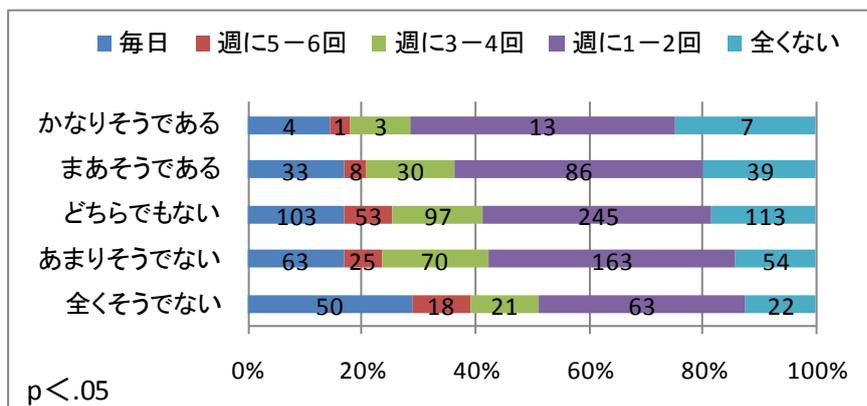
「経済的に家族を支えることは夫の役割」という考えについて、そう思う父親ほど未就学の子どもの食事の世話をする頻度は少なく、そう思わないほど頻度が多い。また、子どもの着替えや身支度、遊び相手、おむつやトイレの世話、本の読み聞かせも同様の傾向が見られた。

図 15 経済的に家族を支えることは夫の役割である意識と食事の世話をする頻度とのクロス集計



「男性は外で働き、女性は家庭を守るべき」という考えについて、そう思うという伝統的な性別役割分業意識を強く持つほど、子どもの食事の世話をする頻度が少なく、平等的な分担意識を持つ父親ほど多く行なっている。他の項目も同様に一貫した傾向が見られた。

図 16 男性は外で働き女性は家庭を守るべきである意識と食事の世話をする頻度とのクロス集計



その他、性別役割分業意識と食事や身の回りの世話などの子育て参加の関係は伝統的な性別役割分業意識である父親ほど参加頻度が少なく、平等的な考えを持つ父親ほど多いことが示された。一方で、父親の性別役割分業意識と小学生以上の子どもと一緒に家で過ごす、遊ぶ頻度などとは一貫した傾向は見られなかった。この結果から、小学生以上の子育ては、未就学児の世話役割を多く含む子育て参加とは異なる特徴があり、頻度だけではなく、質や内容も重要であることが考えられた。

9. 男性の父親アイデンティティと子育て頻度

日本では、子育てを積極的にしている男性にとって、父親役割は自分のアイデンティティの重要な一部であることや、父親役割を重要視している男性ほど子育て参加をするということが明らかになっている。そこで、父親アイデンティティを測る項目として、子どもに対する父親役割観（5項目）と子どもに対する価値観（5項目）の2側面から、男性の子育て頻度との関係を未就学児と就学児に分けて、クロス集計により検討することにした。

（1）未就学児に対する子育てと父親役割観

分析の結果から、父親役割観の5項目すべてが、子どもの遊び相手になることと本を読み聞かせることに強い関連があることが明らかになった。この結果から、父親は、子どもの食事や身支度などの世話等よりも、子どもとの遊びの面を分担する傾向が強いことが明らかになった。

また、父親役割観の5項目のうち、子育て行動7項目と関連が有意であったのは、「子どもに良い環境を整えるのは父親としての役割である」と「父親としての役割を最も重要視している」の2項目であり、特に父親役割意識は男性の子育て行動にとって重要な要因であることが示された。

（2）未就学児に対する子育てと子どもの価値観

子どもと遊ぶことに対しては、子どもに対する価値観の全項目が有意な関連を示していた。また、他の子育て行動についても、子どもの価値観の殆どの項目が有意な関連を示していた。すなわち、父親役割観と同様に、男性の子育て行動には子どもに対する価値観の強い関連がうかがえ、男性にとって父親アイデンティティは重要な要因であることが明らかになった。

（3）就学児に対する子育てと父親役割観

就学児を持つ父親の子育て行動項目と一番多く有意な関連をしていた父親役割観の項目は、「子どもに良い環境を整えるのは父親としての役割である」であり、子育て行動4項目と有意であった。これは、未就学児の父親と同様の結果である。また、「父親としての役割を最も重要視している」父親は、子どもと食事をしたり、家で遊んだり、勉強や習い事の面倒をみたりといった子育て行動と関連していたことから、父親役割観を高く持っている父親ほど、日常においても子どもとかかわろうと努力している面がうかがえる。

（4）就学児に対する子育てと子どもの価値観

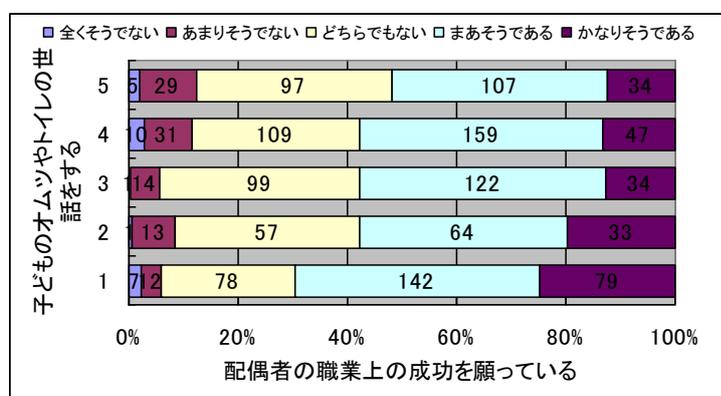
子育て5項目すべてに有意な関連を示したのは、「自分の中で最も重要なのは子どもである」という項目であった。子どもに対する重要度が高い父親は、いろいろな面での子育て行動が多いということがうかがえる。また、親である充実感を感じ、子どもを生きがいと考えている父親は、食事以外の子どもとの行動に対して有意な関連を示している。このことは、就学児ともなると、親子の日常の相互作用が頻繁になり、子育てを通しての親としての充実感や生きがいにつながり、子どもが心のささえになることが考えられる。父親の就学児に対する子育て行動にとっても、父親の子どもに対する価値観は重要な要因であり、父親としてのアイデンティティを高める要因ということが示されたといえるであろう。

10. 夫婦の関係性と男性の子育て

夫婦の関係性による子育てへの影響について検討した。父親の子育て参加に対して、配偶者の存在が大きな影響を及ぼし、良好な夫婦関係は、父子関係を良好にすることも判明している。そこで、この章では、男性の配偶者との関係性（7項目）から、男性の子育てに対する頻度を未就学児と就学児に分けて、クロス集計により検討した。

まず、未就学児に対する子育てと夫婦関係良好度をみると、夫婦関係良好度を測る7項目のすべてと有意な関係を示した子育て項目は、「子どもの遊び相手になる」と「子どものオムツやトイレの世話をする」ことであった。すなわち、男性の子育て行動の中で、身支度や風呂などの子どもの世話よりも、男性は子どもとの遊びの側面を受け持つ傾向があるという先行研究と一致する結果である。また、子どものオムツやトイレの世話をすることと夫婦の関係性の良好度がすべて有意であったという結果（図17）から、夫婦共に朝の出勤前の忙しい時間帯において、子育て行動を分担してお互いの支度や子どもを保育園に送り出す支度などを行わなければならない共働き夫婦にみられる特徴であると考えられる。さらに、夫

図 17



婦関係良好度の7項目のうち、子育て行動と一番多く有意な関係を示したのは「配偶者の職業の成功を願っている」ことであり、子育て行動5項目と有意な関係を示した。これは、すなわち、配偶者の職業に対する男性の意識が、日常の子育て行動の種類や頻度に結びつく重要な要因であるということが明らかになったといえよう。

次に、就学児に対する子育てと夫婦関係良好度からの考察した。就学児に対しても子どもと家の内外で遊ぶことや、勉強や習い事の面倒などをみることに對して、夫婦関係の良好度が多く関連していた。就学児期（本調査では12歳以下対象）は、思春期に向かう子どもの心身の成長にとって重要かつ難しい年齢の前段階である。その年齢の子どもたちに父親がきちんと向き合い子育てをすることは重要であるゆえ、就学児の子育てにも夫婦の関係が良好さとの関連が見出されたことは意義があるといえる。気になる点は、夫婦の関係性と父親が子どもと会話をするものの関連項目が少ない点である。このことは、やはり、男性の長時間労働による帰宅時間の遅さ等、夫婦関係良好度からだけでは測れない他の要因による影響があることが懸念される。一方、未就学児を持つ男性の場合と違い、就学児を持つ男性は、「配偶者の職業上の成功を願う」と勉強や習い事の面倒をみるのみが有意な関連を示し、子どもと夕食をとることや一緒に遊ぶことなどには有意な関連が見られなかった。これは、すなわち、妻の職業上の成功を願う夫は、妻の残業等を快く認めて応援し、自分はその日は早く帰宅して、子どもの勉強や宿題、または習い事の面倒をみるということを示唆していると考えられる。